

# 榎並八ヶ洪水記

大阪府立図書館に、『榎並八ヶ洪水記』という色彩画35枚と、これに添えた説明文を記した上下2冊の自筆本が架蔵されている。これは享和2年(1802)の淀川大洪水の様相を記録したものである。筆者は大坂心齋橋の扇子商南竹堂の主人の小橋屋宇兵衛で、この大洪水の被災地を駆けずり回って、その様子を得意の絵と文で克明にルポルタージュした珍しい本である。

この時の雨台風は日本列島を通過して各所に水害を残したという。

その年の6月27日からの大風雨は、京大坂に集中豪雨をもたらせ、未曾有のすさまじい爪跡を残した。ちょうど京大坂を旅していた滝沢馬琴が、その様子を次のように記している。

『三日(七月)の夜京都木屋町の旅宿へたどりついてみるに、三条五条のほかかり橋はみなおし流し、河原茶店みな流したれば寂寥たり……伏見豊後橋(現在の観月橋)中書島等はみな二階より船にのりて逃しとぞ。淀の城は塀の屋根少し見ゆ。大坂天満橋天神橋ほか五ヶ所落ちたり……。しめ野堤きれて河内へ水おし入り……』(『羈旅漫録』)

淀川の左岸堤が点野(しめ)の村(現寝屋川市)辺りで、約100m余決壊し、河内の村々や、さらには下流の大坂町まで泥水がなだれ込んだ。全国大名の蔵屋敷で有名な中之島も水没した。

『洪水記』では、淀川上流の河内国村々の百姓たちが、身体ひとつで大坂へ逃げ込み、彼等のために東西の町奉行所は早速に上荷船や漁船などを動員して救助船を出したが、被災者は逃げ場を探して四散し、救助の効果も充分あがらず、ために餓死寸前に追い込まれた人も多くあった、と記している。

大坂では夏季休演の芝居小屋を開放して被災者を收容し、大坂の商人などが救援物資を届けて救恤にあたっている。それは、現金で五千両、米麦四千石ほか大量の食糧品・日用品が記録されている。河内の被災村々は237か村に及び、大坂の高台になる玉造から東を見れば「一面の白海のごとく、石山から湖水を見わたすごとく……」というほど、大坂から東の生駒山脈まで泥水が充満したという。そこで、河内の百姓たちは、大坂隣接の中野村の淀川堤防を切って溢水を海へ落としてくれと、徒党を組んで町奉行所に掛け合い、それはまるで百姓一撥のようで、役人たちは大坂を守るためにはそれはできぬと、弓鉄砲を用意して百姓たちと対峙したという。

これはあたかも、明治の淀川大改修のもととなった明治18年の大洪水と似ている。このときは枚方で堤が切れ、河内に充満した水を海へ流すため、時の大阪府知事建野郷三氏らが決死の決断で、中野村(現大阪市都島区)で3か所の堤を切断して水害を最小限に食い止めたのである。この堤切りは「ワザト切り」と呼ばれて、その記念碑がいまも都島の桜宮神社に残っている。

『洪水記』は、やがて左岸の堤防修復に近辺村村総動員で、やっと九月下旬に一応の修復ができたこと、災害の初めから終わりまでを記し、最後に、その年の秋の実りもまったくなく、その代わりに泥田から鮒や小魚が大量に湧き出て、それを大坂に売りさばき、悲嘆の百姓にいささかの恵みとなり、「百姓なんぎの折節、天より授け給ふ事ならんや」と結んでいる、絵入りのユニークな記録である。

(田村利久 大阪天満宮官史編纂室編纂委員)

乃具る人  
 其控流  
 ちよ死  
 てよ  
 小死つ死  
 脚る  
 榊木  
 死つ死  
 死つ死  
 死つ死  
 お母と  
 死つ死



「榎並八箇洪水記」大阪府立中之島図書館提供

定弱病入子依  
 ちとハ少とこをホト  
 村く迎キ土手  
 境、乳香子を  
 たま、切、老たる  
 人かか、ありて  
 迎のやせ年  
 り、これ、を、守  
 定て、治、具  
 ちと、乳、出、し、小  
 高き、ま、ま、乳、の、子  
 る、肉、の、ハ、遊、と  
 ま、ま、小、身、と、や  
 こ、ま、ま、肉  
 ち、け、た、あ、れ、ま

